

取扱注意

H24.7.7作成

青字…修正前

赤字…修正案

長久手市子ども読書活動推進計画（素案）

～キャッチフレーズ～

平成25年（2013）

長久手市

目次

第1章 計画策定の背景
1 なぜ子どもの読書活動推進なのか？—子どもの読書活動の意義—
2 策定の経緯
第2章 計画の基本的な考え方
1 計画の目的
2 計画の対象
3 計画の期間
4 計画の性格
5 基本方針
(1) 家庭、地域、学校との協働・連携による子どもの読書活動の推進
(2) 子どもたちが読書に親しむ読書環境の整備・充実
(3) 子どもの読書活動に関する理解と関心の普及・啓発
6 計画の構成—4つの基本目標—
第3章 現状と課題
1 長久手市の子どもの読書活動の状況
2 長久手市の子どもの読書環境の現状と課題
(1) 中央図書館など市の施設における子どもの読書環境
(2) 学校における子どもの読書環境
(3) 家庭における子どもの読書環境
第4章 推進のための方策
基本目標1：家庭、地域、学校における子どもの読書活動の推進
1 家庭における子どもの読書活動の推進
2 保育園、幼稚園における子どもの読書活動の推進
3 学校における子どもの読書活動の推進
4 児童館などにおける子どもの読書活動の推進
5 中央図書館における子どもの読書活動の推進
6 ボランティア団体との協働の推進
基本目標2：中央図書館などの子どもの読書環境の整備・充実
1 中央図書館のサービスの充実
2 学校図書館の整備・充実
3 学校図書館と中央図書館の連携・協力体制の強化・充実
4 保育園、幼稚園の整備・充実 **
5 地域における子どもの読書環境の充実
基本目標3：子どもの読書活動に関する理解と関心の普及・啓発

1 「子ども読書の日」「読書週間」などにおける啓発事業の実施

2 各種情報の収集・提供

3 優れた取り組みの奨励、優良な図書の普及

基本目標4：子どもの読書活動の推進体制の整備

1 推進体制の整備

施策体系

用語解説

参考資料

① 「子どもの読書アンケート調査」結果

② 学校図書館、児童館、保育園、幼稚園等の読書環境の状況について

③ 法規関係資料

④ 長久手市子ども読書活動推進計画策定委員会要綱

⑤ 長久手市子ども読書活動推進計画策定委員会委員一覧

⑥ 長久手市子ども読書活動推進計画策定経緯

〔本文〕

はじめに

(教育長のことば)

第1章 計画策定の背景

1 なぜ子どもの読書活動推進なのか？—子どもの読書活動の意義—

子どもたちは、日々の読書によって感性と想像力、そして知性を育み、新しい知識を獲得しながら、表現力を豊かなものにし、それとともに力強く人生を生きていく力を少しずつ身に付けてゆくものです。一冊の本がその人の人生を変えることもあります。本を読むことは、それほどの力をわたしたちに与えることがあるのです。子どもたちにとって、その生活世界における読書の効用、その意義は計り知れないものがあるといつてよいでしょう。「子どもの読書活動の推進に関する法律」では、「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである」と述べ、「すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。」と明記しています。

世界そのもの、広く宇宙を一冊の本と見なせば、そして子どもたちが身近に手にする本が、その本の作者が世界という大きな本から読み取り、創作した本であると考えれば、子どもたちが本を自分で選び、じかに手にとって読むことは、子どもたちが読書の楽しみを味わい、さらには世界という本を読み解くことの喜びをそれと知らずに感じとっているのだということになるでしょう。読書活動は、子どもたちを世界という大きな本の中に誘います。したがって、読書活動は、子どもたちがグローバル化とIT化の進展著しい世界の中で自ら進んで考え、判断し、行動し、生きていくために是非とも幼い時から身に付けておかなければならない知的な能動的習慣なのです。

しかしながら、近年、テレビやインターネット、そして携帯電話など、それも高性能の情報メディア・情報媒体の普及により、多様かつ大量の情報が、だれにでも容易に、瞬時に入手できるようになりました。子どもたちの読書環境は大きく変化しています。その結果、子どもたちは読書の効用を味わうことなく、テレビやインターネット、さらにはゲームなどに興じることとなります。加えて、インターネットは、その加速度的な普及とその技術革新とともに、学校教育においても大きな比重を占めてきています。しかし、その利用機会や活用能力には大きな格差があるのも事実です。その均衡を図るには、教育機関が適切な利用機会の提供や正しい情報リテラシー^{*1}教育を行うことが大切でしょう。読書か、それともインターネットか、といった二者択一的な選択は、子どもたちの将来を考えると、現実的ではないでしょう。読書力と情報処理能力との調和のとれた教育が求められます。

確かに、子どもたちは往々にして、読書の楽しみを知ることなく、最新の情報機器に関心を示します。しかし、子どもたちが読書の楽しみ、そのもつ効用を肌身で感じとれば、

読書によって子どもたちは生活に密着した確実な知識を広げながら世界への扉を開き、自ずと社会生活に適応したコミュニケーション力と豊かな人間性を育んでゆくものです。その重要な端緒の一つは、幼児期の絵本を介した親と子のコミュニケーションであり、読書活動の始まりもそこにあるといっても過言ではないでしょう。そのように考えると、子どもたちが健全な精神の発展を遂げつつ、年齢とともに読書力や情報処理能力を身につけることができるよう、幼児期からの読書習慣の形成と調和のとれた読書環境の整備が重要な課題となってきます。

2 策定の経緯

我が国は、子どもの読書活動を推進するため、平成13年12月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」を施行し、この法律に基づき、平成14年8月に「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を策定しました。同法律で、4月23日が「子ども読書の日」と定められました。平成20年3月には、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の成果と課題を踏まえ、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（第二次）」が策定され、おおむね5年間にわたる施策の基本的方針と具体的な方策が示されました。なお、この間、平成17年7月には、「文字・活字文化振興法」が施行され、平成18年3月には、子どもの読書活動の推進にも深く関わる「これからの図書館像～地域を支える情報拠点をめざして～」が策定されています。

「子どもの読書活動の推進に関する法律」は、子どもの読書活動の推進に関して基本的な理念を提示し、国や地方公共団体の責務を明らかにするとともに、子どもの読書活動の推進に関する施策を具体的に定めることにより、総合的かつ計画的に子どもの読書活動の推進を図ることを目的とするものです。

愛知県においては、平成16年3月に平成16年度からおおむね5年間を計画期間とする「愛知県子ども読書活動推進計画」が策定され、平成21年9月には「愛知県子ども読書活動推進計画（第二次）」が策定されました。

長久手市では、国及び愛知県における子どもの読書推進計画の策定状況を踏まえ、**長久手市の保護者や子どもたちを対象に実施した読書活動に関するアンケート調査結果や、子どもたちと関わる各施設への読書活動調査を基にし、**長久手市子ども読書活動推進計画策定委員会で検討を重ね、今後おおむね5年間の子どもの読書活動推進の指針として「長久手市子ども読書活動推進計画」を策定するものです。

第2章 計画の基本的な考え方

1 計画の目的

本計画は、第5次長久手市総合計画に謳われているように、子どもたちが日々の生活の中で豊かな人間性を育み、さらには激しいグローバル化の世界の中で力強く生きていくための知恵を求める源泉となる読書活動にかかわる基本方針を提示し、中央図書館や関係各課だけでなく、家庭・地域・学校その他の様々な場において、それぞれが相互に連携・協働し、子どもの読書活動の具体的な施策を総合的に推進することを図り、長久手市のすべての子どもたちに、等しく十分な読書のための機会と読書環境を提供することを目的とします。

2 計画の対象

本計画の対象は、0歳から18歳までとします。なお、保護者や子どもの読書活動の推進に関わる団体なども対象とします。

3 計画の期間

平成25年度からのおおむね5年間とします。

4 計画の性格

- (1) この計画は、「子どもの読書活動の推進に関する法律」第9条第2項の規定に基づく計画であり、国が策定した「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（第一次及び第二次）と「愛知県子ども読書活動推進計画」（第一次及び第二次）の内容を踏まえ、本市における子どもの読書活動の推進に関する基本的な施策の方向性や取組を示すものです。
- (2) 市民一人ひとりが、子どもの読書活動の推進に積極的に取り組むことができるよう、家庭・地域・学校などのそれぞれの役割を示すものです。
- (3) ボランティア活動など子どもの読書活動の推進への市民参加を促進する環境の整備や市民との協働の方向性を示すものです。

5 基本方針

(1) 家庭、地域、学校との協働・連携による子どもの読書活動の推進

子どもたちが身近に読書に親しむことができるよう、家庭、地域、学校と協働・連携して子どもの読書活動を推進します。

(2) 子どもたちが読書に親しむ読書環境の整備・充実

子どもたちが読書の楽しさを知り、読書を通して生きる力を培うことができるよう、中央図書館、学校図書館、児童館などの子どもの読書環境の整備やサービスの充実に努めます。

(3) 子どもの読書活動に関する理解と関心の普及・啓発

子どもの読書活動の推進を図るため、市民一人ひとりが子どもたちの読書に理解と関心を高めるよう、より一層の普及・啓発に努めます。

6 計画の構成——4つの基本目標——

3つの基本方針に従って子どもの読書活動の推進を図るため、本市の子どもの読書活動の状況を踏まえ、4つの基本目標を設け、それぞれの課題を明確にし、この基本目標を達成する方策を示します。

基本目標

基本目標1：家庭、地域、学校における子どもの読書活動の推進

- 1 家庭における子どもの読書活動の推進
- 2 保育園、幼稚園における子どもの読書活動の推進
- 3 学校における子どもの読書活動の推進
- 4 児童館などにおける子どもの読書活動の推進
- 5 中央図書館における子どもの読書活動の推進
- 6 ボランティア団体との協働の推進

基本目標2：中央図書館などの子どもの読書環境の整備・充実

- 1 中央図書館のサービスの充実
- 2 学校図書館の整備・充実
- 3 学校図書館と中央図書館の連携・協力体制の強化・充実
- 4 保育園、幼稚園の整備・充実
- 5 地域における子どもの読書環境の充実

基本目標3：子どもの読書活動に関する理解と関心の普及・啓発

- 1 「子ども読書の日」「読書週間」などにおける啓発事業の実施
- 2 各種情報の収集・提供
- 3 優れた取り組みの奨励、優良な図書の普及

基本目標4：子どもの読書活動の推進体制の整備

- 1 推進体制の整備

重点施策

長久手市子ども読書活動推進計画では、子どもの読書活動の推進及び読書環境の整備・充実という二側面から検討し、平成25年度から優先的かつ重点的に取り組む施策を重点施策として設定します。本計画における重点施策は、以下の■施策です。平成25年度よりこれら■施策を重点施策として推進していきます。これらの施策の重要性については、「第4章 推進のための方策」において逐次説明していきます。

第3章 現状と課題

《1 長久手市の子どもの読書活動の状況》

長久手市では、子どもたちの読書活動の現況を把握するために、平成23年12月から平成24年1月にかけて、子どもの読書活動に関するアンケート調査を実施しました（参考資料②）。同アンケートによって、本市の子どもたちの読書活動の現状が明らかになりました。そのうち子どもの読書活動を推進するうえで、特に児童・生徒に対する下記の4つの問題に関するアンケート結果の分析により、現状及び課題が明らかになってきたと考えます。

この部分は削除を
予定しています。

〔4つの問題〕

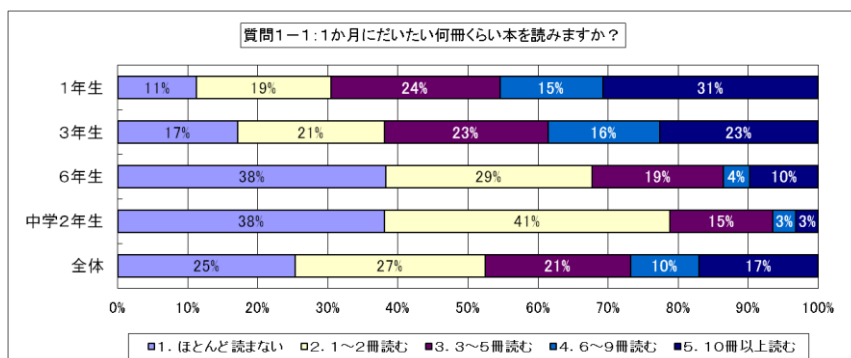
1. 子どもたちは1か月に何冊ほど本を読むか？
2. 本を読まない子どもたちは、どうして本を読まないのか？
3. なぜ子どもたちは本を読むのか？
4. 子どもたちは読書が好きか？

1. 子どもたちは1か月に何冊ほど本を読むか？

1. 読書習慣の有無に大きな差があり、定期的な読書活動の取組が必要です。

児童・生徒は、1か月にどれほどの本を読むのでしょうか。小学生と中学生では、そして小学生でも学年によって、1か月間の読書冊数には大きな差があります。小学生では10冊以上読む児童が低学年で31%、中学年で23%、高学年で10%、中学生でも3%となっています。10冊以上という驚くほどの数の本を読む児童・生徒がいる一方で、問題はそれと反対に「ほとんど読まない」児童・生徒の数値が、学年が進むとともに高くなっていることです。その数値は、小学校低学年で11%、中学年で17%、そして6年生と中学2年生は38%となっています（「質問1-1」のグラフ参照）。この数値の増加は、学年とともに図書資料が絵から文字・活

字へと変わっていくその質的な差異や学校生活の変化などからある程度は予測できるとし



でも、この本を読まない子どもたちに、どうしたら読書の大切さ、面白さ、楽しさを伝えることができるのかという大きな課題が浮かび上がってきます。

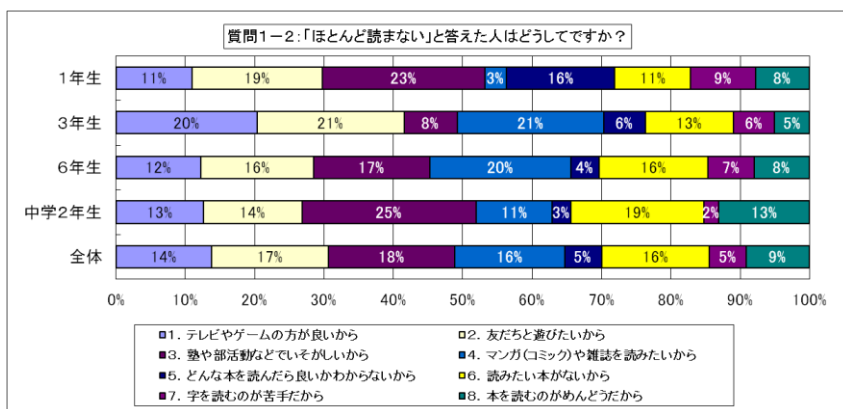
ちなみに、本市と同時期に児童・生徒の読書調査を行った『第65回学校読書調査』（全国学校図書館協会・毎日新聞）では、本を読まない子どもの割合について次のように調査結果を報告しています。「今回の調査では5月1か月間に1冊も読まなかった『不読者』の割合（不読率）が小学5・6年生男子以外のすべてで増加した。小学生全体の不読率は6%で対前年横ばいだが、小学5年生男子は昨年比3%減の9%、小学6年生男子は3%減の13%となった。中学生の不読率は4%増の16%となり、高校生も7%増の51%で、3年ぶりに50%を超えた。小・中・高と進むにつれて読書冊数は減少し、不読者は増加する傾向となった。」調査方法が異なりますから、一概に比較することはできませんが、本市において本を読まない児童・生徒の割合（不読率）の高さが課題です。

2. 本を読まない子どもたちは、どうして本を読まないのか？

2. 子どもは日常生活の中で十分な読書活動を行うことが難しい状況であり、有意義な読書活動の取組が求められます。

本を「ほとんど読まない」理由について、もっとも多い回答は全体では、「塾や部活動などでいそがしいから」18%、続いて「友だちと遊びたいから」17%、「マンガ（コミック）や雑誌が読みたいから」16%、「テレビやゲームの方が良いから」14%でした。確かに、これらの回答は児童・生徒のごく自然な日常的行動の意思表示であると考えてもよいのですが、子どもたちにそれらの行動と読書活動が両立し、読書には読書でしか味わえない大きな楽しみがあるのだということを理解させていくことが大切ではないでしょうか。

また、アンケート結果ではそれとは別の重要な理由が児童・生徒を読書活動から遠ざけているという実態が明らかになっています。小学1年生では、「どんな本を読んだら良いかわからないから」が16%あり、小学1年生で顕著であり、3年生と6年生になると「読みたい本がないから」がそれに替わって、それぞれ13%と16%を占め、中学生になると、その数値は19%となります（「質問1-2」のグラフ参照）。



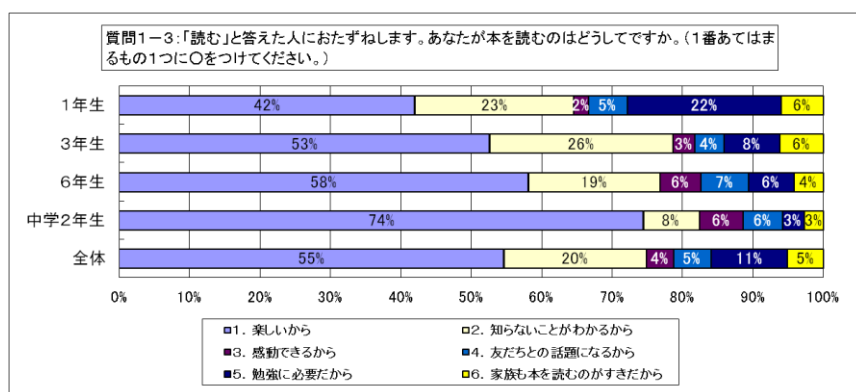
他の理由も含め、課題が明らかになってきます。小学生の低学年では読書指導が重要となり、高学年や中学生になれば、読書案内とともに年齢に適した選書が大切であ

と考えられます。児童・生徒の関心に応え、本へと惹きつける図書資料の充実、いわゆるヤングアダルト（YA）*2 への具体的な方策の提示が大きな課題となります。「ほとんど読まない」子どもたちに読書の楽しさを伝え、自分から進んで本を手にとって読むようにする取組の展開が重要となります。

3. なぜ子どもたちは本を読むのか？

3. 子どもは読書の魅力を認識しており、読書活動の取組方法が課題です。

児童・生徒全体のうち、4人に3人が1か月に何冊かの本を読むのですが、子どもたちは下記のアンケート結果からも分析できるように、読書の効用をそれなりに感じ取っている



と認識してよいでしょう。「どうして読むのか」という質問に、児童・生徒全体では、半数が「楽しいから」と回答しています。この「楽しいから」

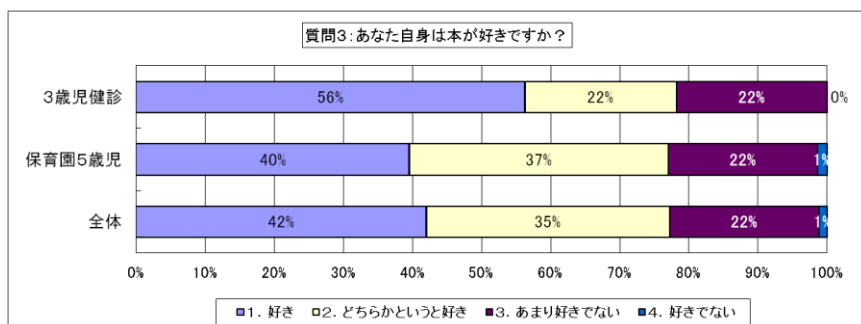
という回答は、学年別に見ると、年齢とともに数値が上がり、中学生では実に74%に達しています。高学年になるにつれて読書の効用の本質が「楽しみ」にあるということを感じ取っていると理解してよいでしょう。次に高い数値を示しているのが「知らないことがわかるから」という回答で、全体では20%です（「質問1-3」のグラフ参照）。この回答を学年別に見ると、低学年ほど高い数値を示していることに注目してよいでしょう。

4. 子どもたちは読書が好きか？

4. 長久手市民は家族も読書が好きであり、家族の読書習慣が子どもに影響を与えます。

※アンケート結果グラフは3歳児、5歳児へ変更する。(資料1-2など)

家庭の読書環境活動が子どもたちの読書に大きな影響を与えます。3歳児健診及び保育園5歳児の保護者へのアンケート結果では、保護者の90%が子どもたちに絵本を読み聞かせ、95%を超える保護者が子どもの成長にとって読書が大切であることを認識しています(参

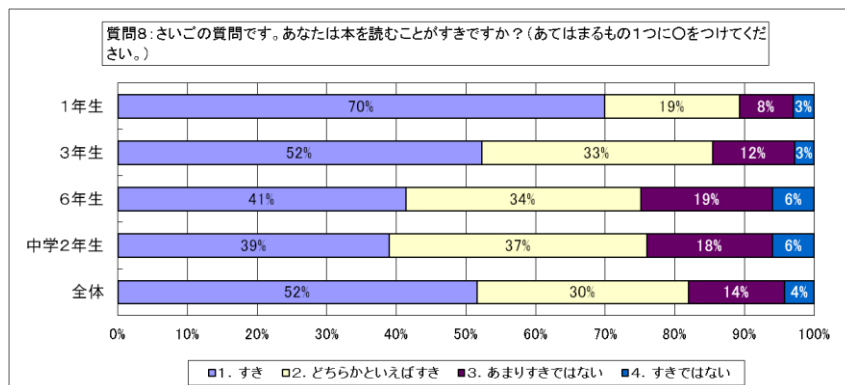


考資料② 3歳児健診参加者・保育園5歳児の保護者集計結果 「質問1:お子さんに絵本を読んであげる時間をどの程度もっていますか？」及び

「質問8：本好きなお子さんにするために、ご家庭で何か工夫されていますか？」参照)。保護者自身、「読書が好きか」という質問には、全体では77%が「好き」と答えています(「質問3」のグラフ参照)。読書好き、あるいは子どもにとって読書が大切であると考えている保護者が子どもに家庭で本を読み聞かせている姿が想像できます。※一方で「ほとんど読まない」と答えている保護者は全体で10%あり、家庭での読書活動に対する啓発活動を行う必要が考えられます。※「(3) 家庭における子どもの読書環境 1子どもの読書活動にとって大切な家庭の読書環境」冒頭から9行分を移動

※3歳児、5歳児の項目を「読書活動の状況」へ入れるため。

「読書が好きかどうか」という質問において、小学生、中学生の児童・生徒のうち、全体では80%以上、小学1年生、3年生では80%以上、小学6年生と中学2年生では、約75%の児童・生徒が読書を「好き」もしくは「どちらかといえば好き」と回答しています。それと反対に、読書が「あまり好きでない」もしくは「好きではない」の割合は、全体では



18%、小学1年生、3年生では10%台であるものの、小学6年生、中学2年生では4人に1人となっています。これらの数値の評価については一概にその是非を断定でき

ないのですが、読書が「あまり好きでない」もしくは「好きではない」の数値は決して低いものではないと考えます(「質問8」のグラフ参照)。

《 2 長久手市の子ども読書環境の現状と課題》

子どもたちにとって、読書活動は環境に大きく左右されます。本がなければ本を読むことはできません。しかし、本ならばどんな本でも構わないというわけにもいきません。子どもたちの想像力と知的好奇心を呼び覚まし、子どもたちを自発的に読書へと誘う良質な本が、子どもたちがいつでも手に触れることができるような身近な場所にあることが必要です。それも子どもたちが読みたい本を読みたい場所で読むことができるといった条件を可能な限り提供できる環境が大切です。子どもたちの読書環境として市の施設が重要な役割を果たすこととなります。そのような場所としては、本市の施設では中央図書館、保育園、学校、そして児童館があります。学校については後で記述するとして、ここではアンケート結果を通して中央図書館、児童館、そして保育園が読書環境としてどのように利用されているか分析してみます。

(1) 中央図書館など市の施設における子ども読書環境

1. 3歳児・5歳児の子どもたちは市の施設をどの程度利用しているのだろうか？

1. 3歳児・5歳児の子どもたちは市の読書に関わる施設を十分に利用していません。

この問題に関して、アンケート結果が示すように（参考資料② 3歳児健診参加者・保育園5歳児の保護者集計結果「質問4：中央図書館や児童館などの図書室をどの程度利用していますか？」参照）、市の施設はよく利用されているとはいえません。利用していない数値は、3歳児で63%、5歳児で50%、全体では52%、半数以上の保護者が利用していません。さらに中央図書館や児童館で、その主要な読書活動として「おはなし会」が開催されているのですが、「おはなし会に参加したことはない」と回答した数値も3歳児で58%、5歳児で67%と高い値を示しています（同資料「質問5-1：図書館や児童館などでおはなし会が開催されていますが、参加されたことはありますか？」参照）。この年齢の子どもたちの保護者へ利用を促すことは大きな課題であると考えます。

2. 児童・生徒は市の施設をどの程度利用しているのだろうか？

2. 児童・生徒は市の読書に関わる施設を十分に利用していません。

児童・生徒が読書活動として利用できる市の施設として、中央図書館と児童館が挙げられます。児童・生徒は、どの程度これらの施設を利用しているのでしょうか。児童・生徒アンケート結果のうち、「質問6：あなたは、1か月のうち中央図書館へ何回行きますか？」（参考資料② 小学1、3、6年生及び中学2年生集計結果参照）からその利用状況を把握することができます。利用状況は、年齢とともに下がっていきます。「行かない」と回答している数値は、小学1年生43%、3年生45%、6年生67%、中学2年生になると、実に81%と

なっています。児童・生徒にとって、市の最大の読書活動の拠点である中央図書館は子どもたちにとってそれほど魅力的な読書環境の場ではないということなのでしょう。児童・生徒にとって魅力ある図書館づくりが課題です。

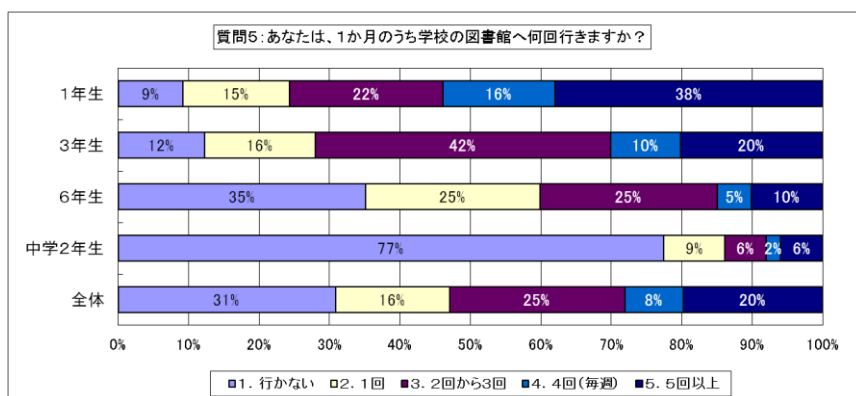
児童館の利用状況については、アンケート結果「質問7：どこの本をよく読みますか？」（同資料参照）から把握できます。児童館の本を読むと回答している児童・生徒は、小学1年生6%、3年生3%、6年生1%、中学生になると、利用する生徒はいないといった状況です。児童館は小学生にとっては読書活動の場にはなっていますが、「遊び」と「読書の楽しみ」という両側面から児童館の図書室の活性化を検討し、同施設の読書環境の整備を図ることが大切ではないでしょうか。

（2）学校における子どもの読書環境

1. 児童・生徒は、学校図書館をどの程度利用しているのだろうか？

1. 学校図書館の利用状況に大きな差があります。

児童・生徒にとって、さまざまな本に出会える最も身近な場所こそ学校図書館であるといっただけでしょう。というのも、読んで楽しい本、知的な好奇心を満たす本、そして深い感動を与える本など、しかも年齢にあった本を幅広く揃えているのが学校図書館の役割



だからです。

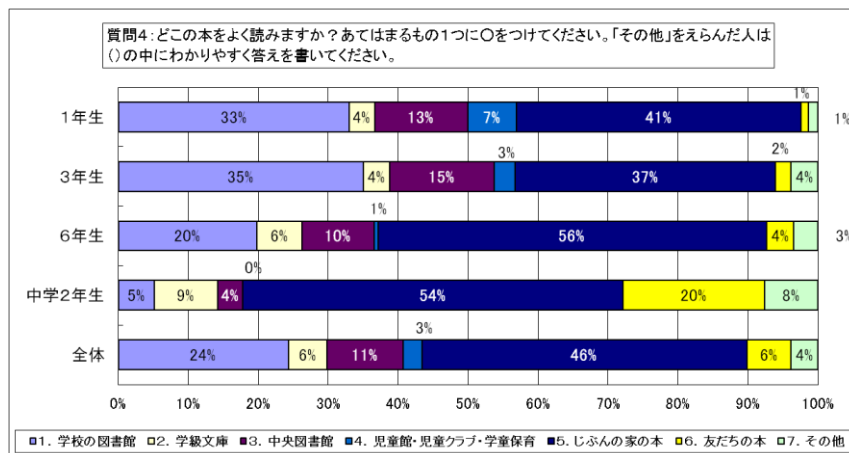
児童・生徒は学校図書館をどの程度利用しているのでしょうか？

アンケート結果から分かることは、年齢とともに、児童・生徒が学校図書館

を利用しなくなっているという実態です（「質問5」のグラフ参照）。中学生になると、実に8割に近い生徒が学校図書館を利用していないという結果が出ています。長久手市は平成22年度より市内小中学校へ学校連携司書を派遣しており、特に小学校において読書活動の実績を上げています。今後、より一層の学校連携事業を推進し、子どもたちの読書傾向、子どもたちにとって学校図書館がいかに自主的な学習の場所として大切であるかということを理解させるとともに、図書資料を充実させ、しかも学校図書館を魅力的な読書の場として利用しやすい環境に整備することが学校図書館の課題と考えられます。

2. 児童・生徒は、どのようにして本を手に入れているのだろうか？

2. 本の入手しやすい環境と読書傾向の把握が課題です。



児童・生徒たちは、年齢とともに、学校図書館や公共施設の図書資料を利用しなくなっています（「質問4」のグラフ参照）。それとともに、自分の家の本を読む数値が高くなってき

ます。小学6年生で56%、中学生で55%になります。この傾向はある意味で自然なことではないかとも考えられます。というのも、いわゆる愛読書、好きな本はいつも身近に置いておきたいのは人間の性向だからです。中学生ぐらいなるとこの傾向は強まってくるのではないのでしょうか。中学2年生の第2位が「友だちの本」20%であることが、年齢とともに読書傾向に大きな変化が生じてくることを示していると考えてよいでしょう。児童・生徒は、実に幅広い分野にわたる本を読んでいます（参考資料② 小学1、3、6年生及び中学2年生集計結果「質問2：どんな本が好きですか？」参照）。児童・生徒のこの読書欲に応えることができるのは学校図書館を筆頭に、中央図書館など市の施設と考えます。児童・生徒は学校図書館や公共の施設の図書資料をそれなりに利用していますから、学校図書館や中央図書館は児童・生徒のために、児童・生徒に満足を与えることができるような読書環境に整備する必要があるでしょう。

(3) 家庭における子どもの読書環境

1. 子どもの読書活動にとって大切な家庭の読書環境

1. 市の施設で実施している読書に関わる行事があまり認知されていない状況です。

家庭の読書環境活動が子どもたちの読書に大きな影響を与えます。3歳児健診及び保育園5歳児の保護者へのアンケート結果では、保護者の90%が子どもたちに絵本を読み聞かせ、95%を超える保護者が子どもの成長にとって読書が大切であることを認識しています（参考資料② 3歳児健診参加者・保育園5歳児の保護者集計結果「質問1：お子さんに絵本を読んであげる時間をどの程度もっていますか？」及び「質問8：本好きなお子さんにするために、ご家庭で何か工夫されていますか？」参照）。「ほとんど読まない」と答えている保護者は全体では10%となっています。保護者自身、「読書が好きか」という質問には、全体では77%が「好き」と答えています。読書好き、あるいは子どもにとって読書が大切であると考えている保護者が子

どもに家庭で本を読み聞かせている姿が想像できます。

※長久手市の子どもの読書活動の状況 項目4へ移動

家庭環境が子どもたちの読書活動に大きな影響を与えるということは、家の人による幼児期の読み聞かせについて、80%を超える子どもたちが記憶に留め、そのうち70%近くが読んでもらったと答えていることから理解できます(参考資料② 小学1、3、6年生及び中学2年生集計結果「質問7：幼稚園や保育園のころ、家の人に本を読んでもらいましたか?」参照)。保護者との読書体験が子どもたちの読書活動に少なからず影響を与えていると考えてよいでしょう。**※「(3) 家庭における子どもの読書環境 1子どもの読書活動にとって大切な家庭の読書環境」12p下から3行目から最終文までと下から10行目から7行分を移動**

しかし、中央図書館など市の施設の利用となると、50%以上の保護者が利用していないというデータが出ています(同資料「質問4：中央図書館や児童館などの図書室をどの程度利用していますか?」参照)。そこで行われている「おはなし会」に参加したことの無い保護者の数値は全体では66%に達しています(同資料「質問5-1：図書館や児童館などでおはなし会が開催されていますが、参加されたことはありますか?」参照)。日程や時間の制約が参加できない大きな理由なのですが、市の施設で行われる事業に気軽に参加できるよう工夫する必要がありますでしょう。

2. 3歳児・5歳児の保護者は、どのようにして本を手に入れているのでしょうか?

2. 読書活動の意義について保護者への働きかけと読書環境の整備を必要とします。

保護者は、幼児期における読書の大切さを認識し、それぞれの家庭で子どもとともに読書に親しむ工夫をこらしているのですが、そのための本をいったいどのようにして手に入れているのでしょうか。この問題は、市の施設の有効利用と密接に結びついていると考えられます。3歳児では、最も高い数値を示しているのは、「本屋で買う」38%で、「家にある本を読んでいる」30%がそれに続きます。「中央図書館で借りる」は8%、「児童館で借りる」は2%となっています。3歳児では市の施設はそれほど利用されていないと言えます。

それに対して、5歳児になると1位は「保育園で借りる」32%、「中央図書館で借りる」は13%と、数値は上がります。なお、児童館の利用は、ともに2%にとどまっています。市の施設、とりわけ保育園と中央図書館の利用の数値が高くなり、幼児にとって両施設が読書活動の大きな役割を担っていると認識できます(参考資料② 3歳児健診参加者・保育園5歳児の保護者集計結果「質問6：お子さんの本をどのようにして手に入れていますか?」参照)。幼い子どもたちの読書活動を活性化するには、市の施設の読書環境を整備するとともに、保護者に施設の利用を積極的に働きかけていくことが重要です。さらに子育てなど時間的な制約のある保護者のために、気軽に本の返却などができる読書環境の整備も望まれます。